

Hokkaido University News

北大時報

平成28年

9

No. 750 September 2016

**3つの国際大学院の設置が認可
泥炭地回復庁(インドネシア)との連携協定を締結**



1 GI-CoREにおける国際連携を核とした新しい3学院の設置について

■ 全学ニュース

- 2 3つの国際大学院の設置が認可
- 2 泥炭地回復庁（インドネシア）との連携協定を締結
- 3 札幌キャンパスを駆け抜ける —2016北海道マラソン—
- 4 北大フロンティア基金
- 6 平成28年度オープンキャンパスを開催
- 7 「北海道大学進学相談会」を東京で開催
- 8 北海道大学及び学校法人北海道科学大学職員の短期相互派遣研修を実施
- 9 平成28年度教員免許状更新講習を開催
- 10 グローバル教育推進センター日本語研修コース修了式並びに同コース、日本語・日本文化研修コース及び北海道大学短期留学プログラム合同送別会を開催
- 11 第2回「新キャンパスマスタープラン応援ワークショップ」を開催
- 12 北海道大学オープンエデュケーションセンターフォーラム「北海道大学におけるオープンエデュケーションの広がり」を開催
- 13 ワークショップ「英語でシラバスを作成する」を開催
- 13 平成28年度第1回北海道大学TF研修会を開催
- 14 女子中高生の理系進路選択プログラム「楽しくサイエンス！～いろいろな科学を知ろう～」を開催
- 14 人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPで若手外国人研究者（DC、PD）向け移転可能研究力強化セミナーを開催
- 15 イノベーション・ジャパン2016に出展
- 16 第18回国立七大学安全衛生管理協議会を開催

■ 部局ニュース

- 17 北極域研究センターがアラスカ大学フェアバンクス校国際北極圏研究センターと部局間交流協定を締結
- 17 Erling Rimestad駐日ノルウェー王国大使が北極域研究センターを訪問
- 18 農学研究院・農学院・農学部が北海道森林管理局と連携協定を締結
- 19 農学研究院で「北海道国際農学会議 -CABS 2016-」を開催
- 20 韓国法学専門大学院協議会一行が法科大学院を視察
- 21 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「テクノロジーと法／政治」が終了
- 22 法学研究科でサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催
- 23 公共政策大学院が「地方公務員向け・地方議員向けサマースクール」を開催—地方公営企業の抜本的な経営改革について討議—



2016北海道マラソン



女子中高生の理系進路選択プログラム「楽しくサイエンス！～いろいろな科学を知ろう～」

- 24 平成28年度水産学部公開講座「弁天町発!! 水産・海洋研究の最前線」が終了
- 25 教育学部でESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム2016（北大プログラム）を開催
- 26 薬学研究院が「第8回薬学研究院研究発表会」を開催
- 26 薬学研究院が「ハラスメントFD研修会」を開催
- 27 薬学部で外国人留学生交流会を開催
- 28 理学部で「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を開催
- 29 北大農場公開2016「搾乳からアイスクリームまで」
- 30 北方生物圏フィールド科学センターで「じゃがいも掘り」を開催
- 31 北方生物圏フィールド科学センター植物園で小学生向け公開講座「葉っぱで作る植物図鑑」を開催
- 31 北海道大学病院が院内レストランとコラボレーション企画～病院食メニューを一般向けに提供～

■ レクリエーション

- 32 学内教職員ソフトボール大会の開催

■ 諸会議の開催状況 33

■ 学内規程 33

■ 研修

- 34 平成28年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修
- 35 平成28年度国立大学法人北海道大学会計実務研修

■ 表敬訪問 35

■ 人事 36

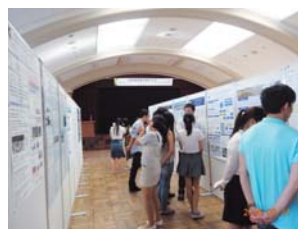
- 37 新任教授紹介

■ 訃報

- 38 名誉教授 稲垣 冬彦 氏
- 38 名誉教授 渡辺 寛人 氏
- 39 名誉教授 東 克彦 氏
- 39 准教授 長谷川拓哉 氏
- 40 名誉教授 田中 明 氏



北極域研究センター Erling Rimestad駐日ノルウェー王国大使が訪問



農学研究院 「北海道国際農学会議 -CABS 2016-」



理学部 「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」



北方生物圏フィールド科学センター 小学生向け公開講座「葉っぱで作る植物図鑑」

GI-CoREにおける国際連携を核とした新しい3学院の設置について

理事・副学長 やすだ かずのり
安田 和則



アカデミアの本質は、大学人が自らの良心と責任に基づいて行う知の創造とその伝承にあります。現代社会においてこの本質を守っていくためには、時流に流されない普遍的な知の探究と、時を得た爆発的な知の創造のバランスと循環が必要です。また、知の伝承には知を発展させ、あるいは社会へ応用できる人材の育成が必要です。そして、知の創造とその伝承は表裏一体の関係にあります。

本学は「近未来戦略150」に沿って、平成26年4月に国際連携研究教育局（GI-CoRE）を設置しました。GI-CoREには現在までに6つのグローバルステーションが設置され、世界の9大学等からトップクラスの研究チームを招致して発展的な国際連携研究が展開されています。各グローバルステーションでは、学内の様々な個性的「強み」が有機的に融合され、世界で本学にしかできない爆発的な知の創造（イノベーション）が進行中です。

各グローバルステーションでは、その成果を基盤とした知の伝承が構想されてきました。他に類を見ない本学のこの挑戦は内外から高い評価を受け、文部科学省運営費交付金から大きな支援を獲得しています。そして今、その知の伝承を行うために新しい3学院（医理工学院、国際感染症学院、国際食資源学院）が設置されようとしています。これらの3学院では学生たちに対して、各領域における世界最先端の知識の伝達を行うだけでなく、いま世界で進行する社会構造の大きな変化の中で主体的に新しい道を切り開いていける能力を持たせるべく、本学でなければできないような様々な教育上の工夫を行おうとしています。

医理工学院は医学研究院、工学研究院、理学研究院、保健科学研究院、歯学研究院、アイソトープ総合センター、北海道大学病院の分野横断型連携の下で、理工学の発展を医学に応用するための新たな学問分野「医理工学」を本邦で初めて確立し、量子力学から発展した放射線物理学や生体の分子挙動に関する理工学を医学に応用できる国際レベルの研究者や技術者を養成します。特長としては、スタンフォード大学との連携による世界トップレベルの医学物理学教育と放射線生物学教育、理工学系と医学系の専任教員が連携した学生の研究指導と学位審査、病院内実習科目の設定などが挙げられます。

国際感染症学院は獣医学研究院、人獣共通感染症リサーチセンター、医学研究院の連携の下で、多彩なバックグラウンドの学生を受け入れ、人獣共通感染症に関する高度な専門知識と問題解決のための幅広い見識を備え、我が国の

みならず世界の感染症研究の発展ならびに感染症の制圧に寄与できる国際的リーダーを養成する本邦初の大学院です。特長としては、メルボルン大学、ユニバーシティカレッジダブリン等のトップクラス研究者との連携研究に基づくグローバル教育、国際機関や海外大学等での海外インターンシップの実施、海外の感染症現場における実践的経験や研究機会の付与、指定科目の履修等に基づいた「Zoonosis Control Expert」の認定等が挙げられます。

国際食資源学院は農学研究院、経済学研究院、教育学研究院、水産科学研究院、地球環境科学研究院、メディア・コミュニケーション研究院、工学研究院、保健科学研究院、北方生物圏フィールド科学センターの連携の下で、地球規模で拡大する複雑な食資源問題の全体を包括的に理解し、さらには専門家として解決に向けたリーダーシップを発揮できる国際的リーダーを養成する本邦初の大学院で、札幌農学校の伝統と北海道の地域特性を活かした教育を展開します。例えば、ソルボンヌ大学、UNESCO、UCデービス校等から招致したトップクラスの食資源問題研究者と連携したグローバル教育、T型人才（ジェネラリストとしての幅広い知識とスペシャリストとしての高度な専門性を兼ね備えた人材）を育てるための学内文理融合カリキュラム、学生が食資源に関わる国内外の様々な現場を実際に体験して主体的に学修を発展させる「ワンダーフォーゲル（語源は、優れた教員を求めて方々の大学を渡り歩いたヨーロッパ中世の学生運動）型学習」などが特長です。

本学では平成27年度からこれらの3学院の設置に向けた準備を関連部局と連携して行ってきました。そして本年8月26日にすべての設置が文部科学省に認可されました。今後は、平成29年4月の設置に向け、学生募集活動を開始する等、より本格的な設置準備を進めることになります。これらの学院の設置が本学の教育力の向上に資するとともに、それがまた研究力の向上にフィードバックされるという良循環効果をもたらすことを期待しています。

最後に、GI-CoREにおける研究・教育の発展はこれで終わるものではありません。しかし3学院の設置はその一つの重要な通過点であると言えます。平成25年の構想開始以来、GI-CoREの発展に様々な角度から貢献していただいたすべての部局及び教職員の皆様はこの書面を借りて感謝いたします。

（注）部局名称はいずれも平成29年4月時点の名称（予定）

■全学ニュース

3つの国際大学院の設置が認可

8月26日（金）、文部科学省より、医理工学院、国際感染症学院、及び国際食資源学院の設置が認可されました。これらの学院は、総長直轄の教育研究組織である国際連携研究教育局（GI-CoRE）に置かれている、量子医理工学グローバルステーション、人獣共通感染症グローバルステーション、及び食水土資源グローバルステーションにおける国際連携研究・教育の成果を、大学院教育へと発展させていきます。

医理工学院は、理工学の実用性を医学に応用するための新たな学問分野「医

理工学」を確立し、量子力学から発展した放射線物理学、または生体の分子挙動に関する理工学を医学に応用できる研究者、技術者を養成します。

国際感染症学院は、エボラウイルス病等の人獣共通感染症に関する高度な専門知識と問題解決のための幅広い見識を備え、我が国のみならず世界の感染症研究の発展並びに感染症の制圧に寄与できる次世代のリーダーを養成します。

国際食資源学院は、地球規模で拡大する様々な食資源問題に対し、具体的

な解決策を提示し実践できる、行動力・融合力・組織力・基礎的な問題解決力を備えた国際的リーダーとなる人材を養成します。

これらの学院は、平成29年4月の設置に向け、学生募集活動を開始する等、より本格的な設置準備を進めることとしており、本学の強み・特色を活かした国際連携研究及び教育を推進することが期待されています。

（総務企画部企画課）



医理工学院



国際感染症学院



国際食資源学院

泥炭地回復庁（インドネシア）との連携協定を締結

8月10日（水）、インドネシアの泥炭地回復庁と連携協定の調印が行われました。この協定は、熱帯泥炭研究に実践的な業績のある本学と京都大学及び総合地球環境学研究所が、同庁をはじめ、同国の教育研究機関と共同研究や人材交流を推進していく目的で締結されたものです。泥炭地回復庁は、昨年12月にパリで開催された国連気候変動枠組条約第21回締結国会議（COP21）において、ジョコ・ウィドド大統領がインドネシアに広がる低湿泥炭地の荒廃・火災による二酸化炭素放出の削減を表明したことを受け、1月に大統領府に設立された組織です。

調印式は、インドネシア大統領官邸（「ムルデカ宮殿」Isatna Merdeka）



調印式後の記念写真

の閣議室において、Nazir Foad泥炭地回復庁長官、稲葉カヨ京都大学副学長、安成哲三総合地球環境学研究所

長、本学の甲山隆司教授（総長代理出席）及び4機関関係者に加え、Teten Masuzukiインドネシア大統領府官房長

官、Bambang Setiadi国家研究評議会議長、在インドネシア日本国大使館関係者の列席のもと、執り行われました。

インドネシアの低湿地では、泥炭湿地林の枯死材由来の木質泥炭が厚く堆積し、莫大な量の有機態炭素が蓄えられていますが、近年の熱帯林伐採と乱開発が地下水位の低下や泥炭層の乾燥化、さらには火災による泥炭消失を招

いており、それらに付随する諸問題が喫緊の解決すべき課題となっています。今後は、本協定に基づいて、泥炭地生態系の再湿地化、植生復元、そして在来種を利用した持続的資源管理に向けた作業を協同で進めていくこととなります。

(国際本部国際連携課)



大統領官邸の閣議室にて

札幌キャンパスを駆け抜ける —2016北海道マラソン—



男子優勝の木滑 良選手



女子優勝の吉田香織選手

2016北海道マラソンが、8月28日(日)に札幌市内で開催されました。開催30回目となる本大会には過去最多の男女約1万6千人*のランナーが参加し、本学札幌キャンパスを駆け抜けていきました。

ランナーたちは、レース終盤の38km付近から本学構内に入り、北キャンパスから札幌農学校第2農場の側を駆け抜け、メインストリートの緑のトンネルを縦断中に40km地点を通過。クラ-

ク像のあるロータリーを左折し、右手に見える緑鮮やかな中央ローンの木陰を通り、札幌農学校時代の正門を移設した南門を出て、北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)を正面に見ながら、ゴールの大通公園を目指してラストスパートをかけていきました。

2009年大会からコースに加えられた本学の緑あふれる美しいキャンパスには、大勢の市民が駆けつけ、その温かい声援や激励、涼やかな景色が、ゴ-

ルまで残り約2kmの苦しい場面にある選手たちの最後の力走を後押ししました。

なお、本マラソンの様子は、UHB・北海道文化放送とBSフジで生中継されました。

※フルマラソンの参加者数

(総務企画部広報課)



涼やかな中央ローン横を力走するランナー



総合博物館前の給水所でランナーを迎えるボランティアの方々

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	19,478件	3,284,021,622円
基金累計額（8月31日現在）	教職員の寄附率	37.8%（1,517件/4,010人）

8月のご寄附状況

法人等12社、個人178名の方々から15,601,660円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社北葉楼、株式会社共同購買会、極光警備保障株式会社、セントラルコンサルタント株式会社、月島食品工業株式会社、医療法人社団 平成醫塾 苫小牧東病院、北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会、北海道武蔵女子短期大学、三井不動産株式会社、明治コンサルタント株式会社

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	浅野 賢二	芦塚 格	飯田 尚治	五十嵐 秀	石井 孝久	石川 清文	石川 伸
石原 明	井上 亮介	入澤 秀次	王丸 秀一	太田 博	小倉 正三	越智さと子	小内 透
小野寺勇夫	小原 大和	帰山 雅秀	加賀基知三	加賀 幸彦	笠井 隆文	金川 眞行	梶島 孝典
鎌田 等	河本 充司	菊池 英明	許士 達広	日下 大器	雲中 慧	河野 透	小林 良清
西城 一翼	齊藤 久	阪井 浩巳	桜井 謙介	佐藤 洋行	三升畑元基	三分一博基	塩満 正哉
志田 壽利	清水 智之	鈴木ひろみ	瀬名波栄潤	十河 正信	高木 節夫	高木美枝子	高桑 雄一
高橋 泰廣	高山佐代子	竹内 俊英	武谷 敬之	田邊 達三	谷口 聡	玉木 規夫	千田 洋一
土家 琢磨	寺澤 陸	東郷 重興	豊田 威信	豊森 孝弘	中江陽一郎	長島 健一	中西映里子
鳴海 英之	西尾 妙織	沼澤 理絵	野口 澄彦	服部 清繁	馬場 直俊	平井 誠	平田 健司
平原 伸幸	福田 勝洋	藤井 政幸	堀川 浩司	前沢 政次	丸山記美雄	三品 壽雄	水野 敏昭
村上 正晃	森久保 司	森田 雅巳	八木みさを	山内 隆嗣	山崎 清輝	山下 俊彦	横濱 秀明
吉沢 正道	吉田 広志						

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

三井不動産株式会社

（個人）

石原 明、小野寺勇夫、加賀基知三、菊池 英明、志田 壽利、高木 節夫、高木美枝子、東郷 重興、鳴海 英之、沼澤 理絵、三品 壽雄

感謝状の贈呈

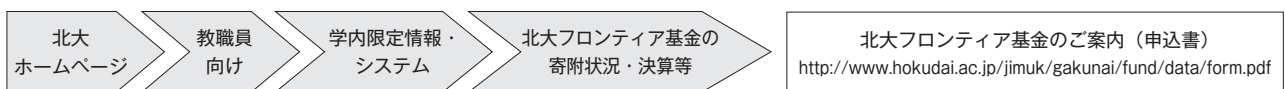


日東電工株式会社 様（平成28年9月5日）

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ（<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>）のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

平成28年度オープンキャンパスを開催

8月6日（土）から9日（火）までの4日間、札幌・函館の両キャンパスにおいてオープンキャンパスを開催しました。

期間中は好天に恵まれたこともあって、大勢の参加者で賑わい、昨年度と同様、延べ1万人を超える参加者が来

場しました。

主に7日（日）に開催された「自由参加プログラム」では、高校生だけでなく、多くの保護者や市民の方々が学部・学科紹介や研究室訪問に訪れました。

また、12の学部等では実験や体験ゼ

ミ等による「高校生限定プログラム」が主に8日（月）に開催され、参加した高校生等にとっては大学における学びの一端を味わう貴重な機会となりました。

（アドミッションセンター）



「総合入試」に関する説明をする喜多村昇
アドミッションセンター副センター長



教育学部「自由参加プログラム」の様子



工学部「自由参加プログラム」の様子

来場者数

	自由参加 プログラム	高校生限定 プログラム	部局等別合計
文学部	830	91	921
教育学部	344	86	430
法学部	864		864
経済学部	457	164	621
理学部	1,522	108	1,630
医学部医学科	560	93	653
医学部保健学科	447	293	740
歯学部	99	30	129
薬学部	1,030		1,030
工学部	904	240	1,144
農学部	674	147	821
獣医学部	601	44	645
水産学部	526	61	587
環境科学院	45		45
附属図書館（本館・北図書館）	354		354
総合博物館	5,844		5,844
国際本部	122		122
北大キャンパスビジットプロジェクト	170		170
高等教育推進機構		0	0
進学相談会 特別修学支援室	453		453
総計〔人〕	15,846	1,357	17,203

「北海道大学進学相談会」を東京で開催

本学単独主催の「北海道大学進学相談会」を8月20日（土）に東京で開催しました。

本相談会は平成19年度に東京で初開催して以降、今年度で10回目となり、昨年度を上回る1,015人が来場しました。

当日は、山口佳三総長の挨拶を皮切りに、全体説明として新田孝彦理事・副学長が本学の魅力について説明を行

い、その後、喜多村昇アドミッションセンター副センター長による総合入試についての説明、山口淳二新渡戸カレッジ副校長による新渡戸カレッジについての説明等を行いました。また、並行して実施した全12学部のブースや、在学生との対話コーナー等では、山口総長、新田理事・副学長をはじめ、各学部やアドミッションセンターの教

職員、在学生等、合わせて70名超が個別相談対応を行い、多くの高校生・保護者等がブースを訪れていました。

この後、10月8日（土）に名古屋で、翌9日（日）に大阪で、同じく開催します。

（アドミッションセンター）



全体説明で挨拶する山口総長



受験生にメッセージを送る
山口総長、新田理事・副学長



来場者で賑やかな会場内



学部相談ブース



入試・総合相談



北大生と話そうコーナー

北海道大学及び学校法人北海道科学大学職員の短期相互派遣研修を実施

第2回目の実施となる「国立大学法人北海道大学及び学校法人北海道科学大学職員の短期相互派遣研修」は、両大学の職員を相互に派遣し、学務系事務を視察、見学及び実習することにより、職員の視野の拡大を図り、もって両大学における学務系事務の効率化、学生サービスの向上及び学務系職員の育成に寄与することを目的としています。

まず始めに、本学学務部において、6月20日（月）～24日（金）の5日間の日程で「国立大学法人北海道大学における平成28年度学校法人北海道科学大学職員短期派遣研修」を実施しました。

同研修には、北海道科学大学学生課学生第一係の前川 晃係長が参加し、本人自ら計画した研修プログラムに基づき、初日は新渡戸カレッジ、北海道地区国立大学教養教育連携実施事業、入学式、構内の喫煙及び学生の懲戒について、2日目は、学生募集広報、就

職支援及び事件・事故・外部からのクレーム対応について、3日目は、倫理教育、ネットリテラシー、課外活動の支援、自治会組織、ガイダンス・オリエンテーションの実施及び窓口指導の方針について、4日目は、学生の福利厚生施設及び発達障害を抱える学生への支援体制、工学部教務課の見学及び実習など、精力的に教務事務を学び、最終日は、徳久治彦理事・事務局長が陪席した学務部各係長との意見交換、また、本研修の成果及び感想等を1時間にわたり発表しました。

次に、学校法人北海道科学大学において、7月25日（月）～29日（金）の5日間の日程で「学校法人北海道科学大学における平成28年度国立大学法人北海道大学職員短期派遣研修」を実施しました。

同研修には、本学学務部学生支援課（課外活動支援担当）の脇坂恭匡主任が参加し、入学式・学位授与式検討

WG及び職員月例研修会への参加をはじめ、学生の疾病・負傷の救済及び健康の保持増進を図ることを目的とした学生医療互助会、優秀な学生を確保することを目的としたスカラシップ制度（授業料減免制度）、大学独自の奨学金制度及び福利厚生施設の管理・運営等について実習しました。また、本研修に係る報告会を、8月3日（水）、高等教育推進機構S10講義室において開催し、本研修の成果及び感想等を1時間にわたり発表し、本研修で学んだことを今後に活かしたい旨の話がありました。

今後も、両大学における学務系事務の効率化等に寄与できるよう、また、他大学の参加を含め、より一層充実した研修となるよう、研修結果を踏まえて、引き続き実施していきたいと考えています。

（学務部学務企画課）



学務部各係長との意見交換の様子



前川係長による研修発表



参加者からの質問の様子



質問に答える脇坂主任

平成28年度教員免許状更新講習を開催

7月30日（土）から8月19日（金）にかけて、今年度の教員免許状更新講習を開催しました。

現在教員免許を持っている現職教員等は、10年ごとに設定される修了確認期限前の2年間に、大学などが開設する30時間の教員免許状更新講習（必修領域・選択必修領域においてはそれぞれ6時間、選択領域においては18時間）を受講・修了し、免許管理者（都道府県教育委員会）に申請する必要があります。本講習制度は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すために、平成21年

4月1日に導入されました。

平成21年度以降、本学では毎年講習を実施しており、今年度も様々な学校種の教員等を対象として、全8講習を開催しました。夏休み期間を中心に開催したことや、バラエティに富んだ内容の講習を開設したこともあり、必修領域の受講者数115名、選択必修領域の受講者数115名、選択領域の受講者数は6講習あわせて205名の方々の参加がありました。

講習では、担当講師からのオリエンテーションの後、各テーマに関する講義や実習が行われ、講習のまとめとして修了認定試験を行いました。講習後に寄せられたアンケートでは、「今後の授業実践への意欲が湧いた」「経

験値の中で何となく考えていたり、感じたりしていたことが理論化され、クリアになった」「子どもたちに『未来に向けてどう動くか』を伝えたり、考える場を作っていきたいと思った」などの意見があった他、実習を主とする講習の受講者からは、「最先端の研究を教えていただいたり、実際に実験をしたりして、驚きの連続だった」などの意見が寄せられ、本講習の意義を改めて感じる良い機会となりました。

なお、今年度開催した講習は以下のとおりです。受講者の皆様、大変お疲れ様でした。

（学務部学務企画課）

今年度で開催した講習

領域	講習名	開設日	講習時間	定員	受講者数
必修	教育の今日的課題とその改革の方途	8/11	6時間	120人	115人
選択必修	現代の学校の抱える課題と改革の方向性	8/12	6時間	120人	115人
選択	最近の近代文学研究と作品の読解	7/30	6時間	50人	15人
	理系の応用技術：工学の世界	8/9	6時間	40人	19人
	特別支援教育	8/10	6時間	120人	120人
	歴史と文化	8/18	6時間	50人	25人
	南紀の森林環境を利用した教育活動	8/2～8/4	18時間	12人	10人
	練習船による水産科学実習	8/17～8/19	18時間	16人	16人



「南紀の森林環境を利用した教育活動」の様子

グローバル教育推進センター日本語研修コース修了式並びに同コース、日本語・日本文化研修コース及び北海道大学短期留学プログラム合同送別会を開催

国際本部グローバル教育推進センター日本語研修コース研修生の修了式を、8月10日（水）に国際本部大会議室において行いました。

この日本語研修コースは、大使館推薦の国費外国人留学生に対して大学院進学前の予備教育として開設されている6か月間の研修コースで、今回修了した研修生は、本年4月に入学した10か国からの12名です。10月からは、11名が本学の研究科等で、1名が小樽商科大学で引き続き学ぶことになっています。

修了式では、グローバル教育推進センター教員や指導教員が見守るなか、川野辺創国際本部副本部長から留学生一人ひとりに修了証書が授与されました。続いて、川野辺国際本部副本部長より日本語でお祝いの言葉があり、学

生は6か月間日本語を学んだ成果を生かして、日本語のスピーチを聞きとろうと真剣に聞き入っていました。最後に集合写真を撮影しましたが、その後もしばらく学生達は、指導教員やこの半年間で親しくなった学生同士で写真撮影を続けていました。

修了式に引き続き、同コースのほか、昨年10月及び今年4月に入学した日本語・日本文化研修コース（日研コース）と北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）の合同送別会が開かれ、グローバル教育推進センター教員や指導教員も合わせて約150名が出席しました。日研コースは、母国で日本語・日本文化に関する教育を行う学部在籍している協定校の留学生に対して日本語、日本文化、日本事情に関する教育を行う研修コース、HUSTEP

は、本学の協定校に在籍する学生に対して原則として英語による授業を実施するプログラムです。

送別会は、新渡戸カレッジ生の坪井里奈さん（水産学部2年）と嶋倉穂南さん（獣医学部1年）による司会進行、小林由子グローバル教育推進センター教授の発声による乾杯で始まり、小林由子グローバル教育推進センター教授の発声による乾杯で始まり、すっきり上達した日本語のスピーチで日本語の勉強や楽しかった学生生活の思い出などについて語り、送別会を盛り上げ、修了生達は、学生同士はもちろん、お世話になった先生方とも語り、楽しい時を過ごしていました。

（国際本部国際教務課）



修了証書を受け取る学生



集合写真（日本語研修コース）



送別会でのHUSTEP学生代表挨拶

第2回「新キャンパスマスタープラン応援ワークショップ」を開催

7月23日（土）、学術交流会館において、学生を参加対象とした、第2回「新キャンパスマスタープラン応援ワークショップ」を開催しました。今回のワークショップは、学生にキャンパスマスタープランへの理解を深めてもらい、キャンパスの課題や長所を学生の視点から発見・提示し、「北大キャンパスの楽しさを増やすために必要なこと」を考えることを目的とした

もので、北大生協環境課題推進委員会の学生メンバー14名及び環境学生団体SCSDのメンバー5名が参加しました。

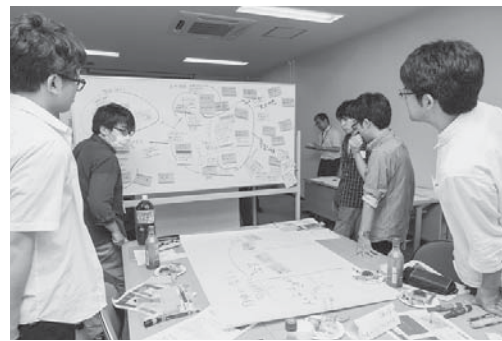
最初にサステナブルキャンパス推進本部の小篠隆生キャンパスアセスメント部門長から、キャンパスマスタープランに関してのレクチャーを受け、4チームに分かれてのディスカッションを行い、北大で「楽しい」「ためになる」「居心地がいい」ことについて

アイデアをシートに整理しました。各チームが発表を行った後、各自が共感できるアイデアに投票を行いました。学生と教職員が、キャンパス運営を意識しながら積極的に意見を交わす良い機会となりました。

（サステナブルキャンパス推進本部、
施設部環境配慮促進課）



キャンパスマスタープラン1996、2006について学ぶ



北大の「楽しい」を増やすために必要なアイデア出し



北大の「居心地がいい」場所についての議論



グループ討議結果の発表

北海道大学オープンエデュケーションセンターフォーラム 「北海道大学におけるオープンエデュケーションの広がり」を開催

高等教育推進機構オープンエデュケーションセンターは、8月5日（金）にフォーラム「北海道大学におけるオープンエデュケーションの広がり」を開催しました。スタジオ型多目的中講義室（情報教育館3階）を会場とし、学内外から57名の参加者が集まりました。

当センターは、オープン教材の開発を通して学内の教育の質向上に貢献することを目的に、平成26年に設立されました。本フォーラムは、この2年間の取組みを学内外の関係者に紹介すると同時に、大学教育におけるオープンエデュケーションの可能性と課題について、参加者と共に考えることを目的に実施したものです。

プログラムの前半では、当センターの活動を紹介し、後半では我が国におけるオープンエデュケーションの開拓者である飯吉 透教授（京都大学理事補・高等教育研究開発推進センター長）による特別講演とパネルディスカッションを行いました。活動紹介では、オープン教材開発の主な事例5件を、担当教員と当センター職員が事例ごとに2人1組になって紹介し、学内におけるオープン教材活用の多様な取り組みを参加者と共有しました。休憩時間には、高等教育機構S講義棟に新設されたスタジオ見学、著作権及びELMSについての説明会を行いました。特別講演では、飯吉教授から京都大学での活動事例を交えつつ、国内外にお

けるオープンエデュケーションの現状と今後についてお話しいただきました。

パネルディスカッションでは、短時間ながら活発な質疑応答が行われました。「オープンエデュケーションは一過性のものではなく、これからの高等教育の新しい基盤になる」「良い教材制作のためには、スタッフと教員との連携が重要」「教職員のネットワークを活用して、学内の研究・教育資源に積極的にアプローチすることで、本学として特色あるオープン教材を作る」など、当センターの今後の活動に対する示唆を得ることができました。

（高等教育推進機構）



高木 哲准教授（左）とセンター職員による獣医学部の事例紹介



講演する飯吉教授



パネルディスカッションの様子

ワークショップ「英語でシラバスを作成する」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教員に対するFDの一環として、8月22日（月）に高等教育推進機構S5講義室において、ワークショップ「英語でシラバスを作成する」を実施しました。

本ワークショップは、高等教育開発（授業改善、カリキュラム改善）の具体的手法の開発・実施・評価等を専門に研究している大阪大学全学教育推進機構の佐藤浩章准教授を講師にお招きし、国際社会で通用するシラバスの書き方を学び、実際に各自のシラバスを英語で作成することを目的として実施したもので、教職員11名が参加しました。

本ワークショップでは、講師の佐藤准教授から、英語で作成されているシラバスを参考に、教員がシラバスを作成する際に留意すべき点について講演

が行われた後、参加者は実際に英語でシラバスを作成しました。講演にはペアワークが組み込まれており、参加者は他の参加者と意見交換を行いながら、理解を深めることができました。

事後アンケートでは、「授業法にも踏み込んだお話を聞けたので、多くのヒントをいただき、それをどうシラバスに反映させるかについて深く考えることができました」「自分のシラバス

の何をどう修正すればよいか、具体的に理解することができました」等の意見が見られ、多くの参加者に好評でした。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



研修の様子



平成28年度第1回北海道大学TF研修会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、8月23日（火）に高等教育推進機構S5講義室を会場として、TF（ティーチング・フェロー）研修会を開催しました。本研修は、平成27年度からTF制度が本学において導入されたことに伴い、採用候補者である大学院生を対象として平成27年2月から実施しているものです。

TF制度は、大学院博士課程の学生を対象に、大学院教育の一環として、教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで、教育能力を高め将来指導的役割を果たす人材を養成するとともに、学士課程教育をより一層充実させることを目的としています。また、TFに採用される学生には、本研修会などのTF研修の修了を義務づけ、事前に理解を深めてもらうこととしています。

全体会では、新田孝彦高等教育推進機構長の挨拶に続き、「TFとしての心構え、クラスマネジメント、教育倫理綱領の理解」「シラバスの構成と読み方」といった、TFに関する具体的な内容の講演が行われました。

その後、アクティブ・ラーニング実習が行われ、参加者は4～5名ずつのグループに分かれ、アイスブレイクを行った後、設定されたテーマの下、グループ討議を行いました。最後にグ

ループごとにその成果を発表し、全体で討論しました。

今回の研修会では、修士課程2年次及び博士課程の学生29名が修了しました。どの参加者も積極的に研修に取り組んでおり、TFに高い意欲を持って臨んでいる様子が感じられました。

平成28年度第2回北海道大学TF研修会は、平成29年2月に開催予定です。

（高等教育推進機構）



全体会の様子



アクティブ・ラーニング実習の様子

女子中高生の理系進路選択プログラム 「楽しくサイエンス！～いろいろな科学を知ろう～」を開催

人材育成本部女性研究者支援室は、科学技術振興機構「平成28年度女子中高生の理系進路選択支援プログラム」に採択され、「Girls be Ambitious!～科学を楽しむ、理系キャリアを知る～」と題した一連の企画を実施しています。女性研究者支援室はこの事業を通じて、女子中高生に理系に対する具体的なイメージを持ってもらい、理系に興味のある女子中高生が様々なバイアスに影響されずに理系を目指せるよう、体験を通じた情報提供を行っています。この中の一般公開型イベントとして7月17日（日）に「楽しくサイエンス！～いろいろな科学を知ろう～」を開催しました。このイベントは市内全中学生と約20

校の高校1・2年生を対象に広報を行い、女子を中心とした中高生229名と保護者112名の来場者がありました。イベントでは来場者が自由に体験できる科学体験ブースと女性研究者による講演が行われました。

科学体験ブースは出展グループを学内で公募した結果、理系の研究室等から14ブースの出展があり、68名の学生や教員がスタッフとして参加しました。どのブースも女子中高生が興味を持つよう工夫されており、参加した女子中高生や保護者は大変興味を持って体験していました。共催の室蘭工業大学からは鑄造の実験ブースが出展されました。また、女性研究者による講演

では、4名の講演者に女子中高生の良きロールモデルとなるようなお話をいただきました。

参加者アンケートには「色々な話を聞いて興味を持ち、理系に進みたいという気持ちが強くなり、頑張りたと思うようにもなったので良かったです」「大学には色々な学部があり、その一つについて詳しく学べるといふところに興味をもった。もっと参加できるブースを増やしてほしいです」といふような回答が多数あり、効果が認められたことから、次年度以降も継続して実施したいと思います。

(人材育成本部)



農学部ブース



理学部ブース



獣医学部ブース

人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPで若手外国人研究者（DC，PD）向け移転可能研究力強化セミナーを開催

人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPでは、若手外国人研究者（DC，PD）向け移転可能研究力強化セミナー「Negotiations（影響力と交渉力）」を開催しました。

8月15日（月）のセミナーには、デール・カーネギー・トレーニング・ジャパン株式会社よりGary Smith氏を講師に迎え、人に影響を与え、建設的でポジティブな関係づくりを促進させるためには欠かせないオールウインの交渉スキルを、実践を交えて全て英語で学びました。18名（9部局、16カ国）が参加したこのセミナーは連携型

博士研究人材育成推進室（COFRe）が共催し、海外留学を目前に控えた育成対象助教1名が参加しました。「相手の立場を尊重する考え方を学んだ」「将来に有用なスキルを学べて大変参考になった」という感想が寄せられました。

9月16日（金）には、アクティブ・コネクター株式会社でキャリアコンサルタントを務めるSebastian Heradia氏をお迎えし、日本における博士課程留学生のキャリアプランについてお話いただきました。

I-HoPでは今後もこのセミナー・シリーズを随時行っていく予定です。興

味のある方は、人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

(人材育成本部)



Smith講師の講演に聞き入る若手外国人研究者

イノベーション・ジャパン2016に出展

8月25日（木）・26日（金）の2日間、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）及び国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）が主催となり、イノベーション・ジャパン2016が東京ビッグサイトにて開催されました。

イノベーション・ジャパンは、大学の研究シーズと産業界の技術ニーズを

結びつける国内最大のマッチングイベントであり、今回で13回目の開催となります。400件を超える大学等の研究成果が一同に集結し、「超スマート社会」「情報通信」「環境保全・浄化」「ライフサイエンス」「低炭素・エネルギー」「医療」「マテリアル・リサイクル」「装置・デバイス」「シニアライフ（高齢社会）」「ナノテクノロジー」「防

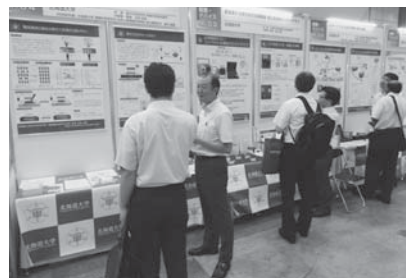
災」の11分野に分けて展示されました。

各ブースとも企業関係者や研究機関関係者らが数多く訪れ、展示内容について熱心に質問し、意見交換を行いました。終日、人の流れは途切れることなく、本学の最先端の研究成果を産業界に広くアピール出来た2日間でした。

（研究推進部産学連携課）

本学出展の11テーマ

- ・ 情報科学研究科 教授 杉本 雅則
【情報通信】「スマホでここまでできる～音響測位と可視光通信の世界」
- ・ 先端生命科学研究院 准教授 比能 洋
【超スマート社会】「糖鎖情報の解読・利用技術－グライコム分析・合成・集積・利用技術－」
- ・ 工学研究院 教授 向井 紳
【ナノテクノロジー】「新規手法による1D・2D・3Dカーボンの高効率製造」
- ・ 工学研究院 教授 米澤 徹
【ナノテクノロジー】「低温焼結性銅微粒子システム」
- ・ 工学研究院 准教授 戸谷 剛
【低炭素・エネルギー】「フィルタを用いない波長制御赤外線ヒーター」
- ・ 工学研究院 助教 石田 晃彦
【装置・デバイス】「実験室から持ち出せる超軽量・超小型液体クロマトグラフ」
- ・ 電子科学研究所 教授 太田 裕道
【装置・デバイス】「電気抵抗と磁化の両方で記憶する新メモリー」
- ・ 電子科学研究所 助教 大友 康平
【ライフサイエンス】「「イメージング」は、「ひやくぶんはいっけんにしかず」と読む」
- ・ 遺伝子病制御研究所 講師 上村 大輔
【医療】「創薬に繋がる新しい炎症誘導機構と神経刺激による制御」
- ・ 北方生物圏フィールド科学センター 教授 宮下 和士
【ライフサイエンス】「見えないものを視る～計測機器を用いた水中生物の可視化～」
- ・ 高等教育推進機構 特任助教 成瀬 延康
【装置・デバイス】「スマートフォン向け安価小型分光器」



ブースの様子

第18回国立七大学安全衛生管理協議会を開催

8月2日（火）、函館キャンパスにおいて、本学が当番校となり「第18回国立七大学安全衛生管理協議会」を開催しました。

本協議会は、本学を含む国立七大学が、大学における安全衛生管理の諸問題について情報交換を行うことにより、連携を深めることを目的として、年2回各大学の持ち回りで開催しています。

はじめに、上田一郎安全衛生本部長による挨拶の後、九州大学の松川耕三総務部総務課課長補佐から、先に発生した熊本地震に対する支援についての報告、石井哲也安全衛生本部教授から、ライフサイエンスに関する安全衛生の取組についての報告等がありました。協議会では活発な議論が行われ、各大学間の情報交換、連携強化が図られました。

また、本協議会の前日には、水産学部附属練習船「おしよる丸」の安全対策等についての視察を実施し、本学を含む4大学から11名が参加しました。船内は、転倒防止等の安全対策が徹底されており、参加者からは、今後の大学内における安全対策の参考にしたいとの感想がありました。

（安全衛生本部）



挨拶をする上田安全衛生本部長



報告をする石井安全衛生本部教授



おしよる丸視察の様子

■ 部局ニュース

北極域研究センターがアラスカ大学フェアバンクス校国際北極圏研究センター（IARC）と部局間交流協定の調印式を行いました。

北極域研究センターでは、8月1日（月）に、アラスカ大学フェアバンクス校国際北極圏研究センター（IARC）と部局間交流協定の調印式を行いました。

本調印式は、アラスカ大学フェアバンクス校国際北極圏研究センター長のHajo Eiken教授が、本センターが中心となって開講したHokkaidoサマー・インスティテュート科目「衛星から見る極寒の地“北極”（Satellite Views of the Arctic）」の講義のため来日された機会に実現しました。

本学はすでにアラスカ大学と大学間交流協定を締結していますが、今回の

部局間交流協定では、北極域研究に焦点を当てて活動している両センター間でのより活発な教員や学生の派遣・交流、国際共同研究の推進やジョイントシンポジウム開催等を強化することを目的としています。



調印式でサインするEiken教授（右）

なお、本協定は、平成27年4月の本センター設立以来、初の部局間交流協定締結となり、今後更なる国際的研究の発展が期待されます。

（北極域研究センター）



締結書を持つ齊藤誠一センター長（左）とEiken教授

Erling Rimestad駐日ノルウェー王国大使が北極域研究センターを訪問

8月2日（火）、Erling Rimestad駐日ノルウェー王国大使が横浜慶彦在札幌ノルウェー王国名誉領事とともに北極域研究センターを訪問されました。

大使一行は川端和重理事・副学長、齊藤誠一センター長の出迎えを受け、齊藤センター長及び大塚夏彦教授からの同センターの事業に関する説明に興味深く聞き入られた後、今後のノルウェーと日本の間の北極域研究等に関する連携について活発な議論を行いました。

その後、一行は7月にリニューアルオープンした総合博物館に新設された

北極コーナーを視察し、齊藤センター長及び田中雅人特任教授から展示に関する説明を受けられました。

また、Rimestad大使はアイヌ・先住民研究センター及び附属図書館も視察

されました。今回の訪問は、本学とノルウェー王国大使館との関係がより一層深まる有意義な機会となりました。

（北極域研究センター）



センターの取り組みについて説明する齊藤センター長（左側）



大塚教授から説明を受けるRimestad大使（右側）



総合博物館にて北極コーナー視察



総合博物館にて北大の歴史コーナー視察



記念撮影

農学研究院・農学院・農学部が北海道森林管理局と連携協定を締結

農学研究院・農学院・農学部と林野庁北海道森林管理局は、7月15日（金）に、連携協定を締結しました。今回の協定は、今年5月に見直された「森林・林業基本計画」を踏まえ、森林・林業・木材分野に関して連携・協力することにより、北海道における適切かつ効率的な森林整備、森林資源の利活用の推進、自然環境の保全並びにこれらに取り組む人材の育成を推進し、林業・木材産業及び北海道の持続的な発展を加速することを目的として

います。森林整備等に関する技術の開発、環境の保全、人材育成、人的交流の促進等を図り、今後、より一層の林業・木材産業の成長産業化、北海道の持続的発展に寄与することが期待されます。

締結式終了後、農学部大講堂にて、北海道の森林・林業・木材産業が直面する課題の解決に向けた取り組みのキックオフとして、学生、林業・木材産業関係者等を対象とした協定締結記念講演会「これからの森づくり・人づ

くり」が開催され、約130名の参加がありました。

記念講演会では、北海道森林管理局の中村 毅計画保全部長より「これからの森作りの方向性～新たな森林・林業基本計画」、続いて、農学研究院の渋谷正人准教授より「これから必要な人材育成とは？」と題して講演がありました。

（農学院・農学研究院・農学部）



協定書を取り交わす黒川正美北海道森林管理局長（右）と横田 篤農学研究院長（左）



記念講演会の様子

農学研究院で「北海道国際農学会議 -CABS 2016-」を開催



全体集合写真

8月22日（月）～26日（金）までの5日間、本学、韓国・嶺南大学校、中国・雲南農業大学、米国・アイオワ州立大学の4大学から教職員33名、学生59名が参加し、「北海道国際農学会議2016（International Conference on Agricultural Biodiversity and Sustainability 2016）」を開催しました。

農学の命題である食糧生産と環境問題の解決に各国が共同して取り組むための下地となる国際性を育む目的で、自給率40%弱の日本と韓国、膨大な食糧が必要な中国、超食糧輸出国である米国の4大学が行う第8回国際フォーラムに、今回新たに中国農業大学がオ

プザーバーとして参加しました。

22日（月）～24日（水）には、農学部大講堂において、横田 篤農学研究院長の挨拶の後、英語による講演会、シンポジウム及びポスターセッションを行いました。また、24日（水）には、未来の国際農業研究を担う若手研究者や学生に各国農業を理解させるとともに、食糧の安全・安心を保証・担保できる環境調和型の農業技術の開発を促すことを狙いとして国際会議を開催し、オブザーバー参加の中国農業大学が本会の正式メンバーとして承認されました。

25日（木）・26日（金）には、主に

海外からの参加者を対象に、忍路臨海実験所、北方生物圏フィールド科学センター試験圃場などの施設見学を行いました。日本一の食糧生産地であり水産・農業資源に恵まれている北海道の現状を海外の研究者に紹介することで、技術情報の交換や今後の研究交流への発展が期待されます。

また、27日（土）～29日（月）には環境問題に関するワークショップを開催し、海外からの学生8名と本学学生6名が参加しました。

（農学院・農学研究院・農学部）



横田農学研究院長の挨拶



講演者発表



ポスター発表

韓国法学専門大学院協議会一行が法科大学院を視察



訪問団一行と本学法科大学院教員

韓国の法学専門大学院（日本の法科大学院に当たる）から構成される法学専門大学院協議会の一行が、8月22日（月）に法科大学院（法学研究科法律実務専攻）を訪問され、意見交換が行われました。法学専門大学院は、韓国全土に25校設置されていますが、今回の訪問団は、同協議会の李炯珪理事長（漢陽大学・法学専門大学院長）をはじめとする15校の法学専門大学院の院長と同協議会の事務局長及び担当課長の17名から成る大規模なものでした。コーディネーターは、白英準韓国未来創造科学部局長（法学研究科客員研究員）と丁文杰助教（法学研究科）が務め、通訳は丁助教が担当しました。

当日は、長谷川晃法学研究科長と李理事長の挨拶の後、法学研究科の小名木明宏教授（前法科大学院長）の司会のもと、佐々木雅寿教授（法科大学院教務委員長）から法科大学院の概要が紹介され、また法科大学院が特に力を入れている知的財産法教育について、担当教員である田村善之教授から説明がありました。そして、事前に同協議

会から提起されていた質問事項について池田清治教授（元法科大学院長）から回答された後、インテンシブな議論がされました。テーマは、教育方法はもとより、法科大学院の財政状況にも及ぶ多面的なもので、当初予定していた時間を大幅に超過しました。意見交換の後には、法廷教室や図書室などの施設見学を実施しました。タイトなスケジュールでしたが、充実した内容に李理事長からは謝辞が述べられました。

韓国の法学専門大学院制度は、2009年に発足したもので、日本の法科大学院とは異なり、教育期間はすべて3年、25校の学生定員の総計は1学年で約2,000名です。設置後、すでに6年以上経過しているため、日本の法科大学院と同様、かなりの教育経験が蓄積されており、本学の法科大学院としても、現場の「生の声」を聞くことができる貴重な機会となりました。

経済のグローバル化が進捗する中、リーガルサービスは社会的なインフラとして、ますますその重要性を増しつつあり、リーガルサービスを担う人材



意見交換の様子



李理事長（左）から長谷川法学研究科長（右）へ記念品の贈呈



李理事長からの謝辞

の育成は中心的な課題となっ
ています。法曹養成制度の細部については、日韓では若干の相違点があるものの、大綱においては共通する部分が多く、議論は活発、かつ、極めて有意義なものとなりました。

（法学研究科・法学部）

法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座 「テクノロジーと法／政治」が終了

法学研究科及び附属高等法政教育研究センターでは、7月21日から8月18日までの毎週木曜日（8月11日を除く）、全4回にわたって、公開講座「テクノロジーと法／政治」を開講しました。

本講座は毎年夏に一般市民を対象に開催しているもので、今年で34回目となります。毎年参加される熱心な受講者も多く、法学研究科の夏の恒例行事となっています。ここ数年は20～40代の新規受講者も増え、今回も定員50名を大きく上回る90名の受講者を得ての開催となりました。

科学技術の進化が社会や生活に及ぼす変化に対し、法や政治はいかに向き合っていくのか、全4回の講座では、講師を務める法学研究科教員が、それぞれの専門である国際政治、公法、民法、刑法の視点から、未知の領域に関する法や規制のあり方、政策を見る手がかりについて解説しました。原発問題や生殖補助医療、ドーピング問題などを題材に、熱のこもった講義が繰り広げられました。最終講義終了後に行われた閉講式では、尾崎一郎高等法政教育研究センター長から所定の回数（3回以上）を受講した78名に修了証

書が授与されました。

法学研究科では、大学が今後担うべき新しい役割を「多様な立場の方々と総合的に議論する場を構築すること」と考え、現在、様々な交流のかたちを模索しています。次年度以降の本講座も、法学・政治学を中心にしながら、より幅広い層の関心を喚起する魅力的なテーマを設定し、異分野間での対話を活発にしていきたいと考えています。

（法学研究科・法学部）

「テクノロジーと法／政治」（道民カレッジ連携講座、札幌市教育委員会後援）

- 第1回 7月21日（木）
「科学技術と政治」 法学研究科・公共政策大学院 教授 鈴木一人
- 第2回 7月28日（木）
「原発再稼働と法」 法学研究科・公共政策大学院 教授 山下竜一
- 第3回 8月4日（木）
「生殖補助医療と親子関係」 法学研究科 准教授 榎橋明香
- 第4回 8月18日（木）
「科学技術と刑法」 法学研究科 教授 小名木明宏



長谷川晃法学研究科長より開講の挨拶



第1回 鈴木教授



第2回 山下教授



第3回 榎橋准教授



第4回 小名木教授



尾崎センター長より修了証書の授与

法学研究科でサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催

法学研究科では、8月18日（木）から21日（日）までの4日間、人文・社会科学総合教育研究棟において、サマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催しました。

本セミナーは、日本弁理士会から弁理士の継続研修のための外部研修機関としての認定を受けて、平成21年度から毎年度開催しているものです。その実績が認められ、平成26年度には、文部科学省による「法科大学院公的支援見直し加算プログラム」の審査において、本セミナーは「知的財産法領域に

おける社会的ニーズに即応した『実効的な継続教育プログラム』の実施」であることを理由に「特に優れた取組」であるとされました。

第8回目となる本年度は、本研究科の田村善之教授及び吉田広志教授、外部招聘講師の三村量一氏（長島・大野・常松法律事務所弁理士）、鮫島正洋氏（内田・鮫島法律事務所弁理士／弁理士）、韓相郁氏（韓国金・張法律事務所弁理士）によって、特許法に関する実務的課題につき、数々の重要裁判例を踏まえてわかりやすく講義されました。受講者は、知的財産事件に携

わる実務家（弁理士、弁護士、企業の知的財産部員等）ばかりでなく、大学の教員、大学院生など幅広い分野にわたり170名を超えました。昨年度からは、修士課程の授業としても開講しています。受講者は熱心に受講されるとともに、講義の最後の質疑応答では現実に即した様々な質問に対し、各講師は丁寧に答えられていました。本年度のサマーセミナーも多くの温かい反響をいただいた中で盛会裡に終了しました。

（法学研究科・法学部）



講義を行う田村教授



講義の様子

公共政策大学院が「地方公務員向け・地方議員向けサマースクール」を開催—地方公営企業の抜本的な経営改革について討議—

公共政策大学院（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）では、社会貢献活動の一環として、8月23日（火）・24日（水）に「地方公務員向けサマースクール」を、24日（水）・25日（木）に「地方議員向けサマースクール」を開催しました。

「地方議員向けサマースクール」は、地方分権改革が進む中、ますます重要な役割を果たすことになる地方議会の活性化と議員の自己啓発・自己研鑽に資することを目的に、大学院が取り組むものとしては全国初の試みとして、平成20年にスタートしたものです。過去8年間、各界よりご好評を得てきたことから、本年は地方公務員向けにも同様のサマースクールを新たに開講しました。

人口減少が進み地方財政が厳しさを増す中で、地方自治体にとって不可欠な取組である「地方公営企業の抜本的な経営改革」を、両スクールとも今年

のテーマとして取り上げ、北海道内の市町村職員や議会議員はもとより国家公務員、道外の市議会議員なども含め「地方公務員向けサマースクール」には33名、「地方議員向けサマースクール」には50名もの受講者が参加しました。

内容としては、まず基調講義で、総務省自治財政局公営企業課の滝川伸輔課長が「地方公営企業の現状と課題」、また事例紹介では、日本水道協会水道技術総合研究所の本多裕孝首席研究員が「水道事業の運営基盤強化」、岩手中部水道企業団の菊池明敏局長が「水道事業における広域化統合」と題した講演をそれぞれ行いました。

また、グループ討議としては、総務省が全ての地方自治体に要請している「経営改革」と先進的な取組事例集を参考にして、地方公務員は5つの、地方議員は4つのグループに分かれて討議を行いました。具体的には、受講者

が関係する自治体の公営企業について、①経営状況などの現況、②解決すべき課題、③課題解決のための改革の方向性、という3つの項目について、熱心な議論が交わされました。討議後は、全体でグループ討議の結果発表と意見交換を行いました。

受講者からのアンケートでもおおむね高い評価を受けており、市町村職員や議員の間で、ともに学び、情報を交換し、議論することができる当スクールのような場が強く求められていることを今回もうかがえたところです。

今回のサマースクールを一つの契機として、受講者がお互いに親密なネットワークを形成し、今後とも情報交換を重ねながら同志を増やしつつ、それぞれの地域で地域の活性化・振興などに取り組んでいかれることを期待しています。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）



講義風景



全体討議での意見交換



発表資料の作成

平成28年度水産学部公開講座 「弁天町発!! 水産・海洋研究の最前線」が終了

水産学部では、7月2日から8月20日の土曜日に、全6回の公開講座「弁天町発!! 水産・海洋研究の最前線」を開講しました。

本講座で紹介した函館市国際水産・海洋総合研究センター（以下、センター）は、国際的な水産海洋研究と教育及び産学官連携研究の拠点としての役割を担うために平成26年6月に函館市弁天町に開所しました。本講座で

は、センターに入居する大学教員や企業担当者を講師に招いて、センターで展開されている様々な研究や事業について講義を行いました。

本講座の最終回では、センターに会場を移して講義を行ったほか、施設見学を行いました。普段は見ることができない施設の見学では、受講生から驚きの声や多くの質問が寄せられ、受講生は、函館市が国際水産海洋都市とし

て社会に果たすべき役割の重要性について、理解を深めることができた様子でした。

見学後は4回以上出席した38名の受講生に安井 肇水産科学研究院長から修了証書が手渡され、延べ242名が受講した本講座は成功裏に終了しました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

講演題目と講師

第1回 「海洋生物を計測する」

北方生物圏フィールド科学センター 教授 宮下和士

第2回 「海獣のいる海～ヒトと海獣との共存を考える～」

北方生物圏フィールド科学センター 准教授 三谷曜子

第3回 「飼育実験によるイカ、スケトウダラ研究」

北方生物圏フィールド科学センター 助教 山本 潤

第4回 「魚の卵を科学する」

水産科学研究院 准教授 平松尚志

第5回 「海の森創り」

株式会社エコニクス マリンラボ所長 鹿糠幸雄

第6回 「推進機構の役割／センター施設紹介」

一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構 産学官連携コーディネーター 三浦亜希子



熱心に聴き入る受講生



質疑応答の様子



施設見学の様子



安井研究院長から修了証書を授与される受講生

教育学部でESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム2016 (北大プログラム) を開催

教育学部では、「社会の持続可能な発展にとって教育のもつ役割は何か」を主題とした双方向型短期留学支援事業であるESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な発展のための教育) キャンパスアジア・プログラムを、韓国・高麗大学校とソウル国立大学校、中国・北京師範大学及びタイ・チュラロンコン大学の各教育学部と連携して、平成23年から毎年開催しています。今年度は、これら海外4大学にロシア・サハリン国立大学教育学部が加わり、「ESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム」として、新たな一歩を踏み出し、北大生20名、海外生20名が参加しています。

本学で行う「ESD北大プログラム」の開催に先立ち、本プログラム参加学部生を対象とした教育学国際講義 (ESD事前学習) を開講し、HUSTEP国際交流科目受講生と合同で、スーパーグローバルハイスクールである市立札幌開成中等教育学校との高大連携により同校教諭・生徒との協働開講が実現でき、英語によるコミュニケーション・プレゼンテーション力量の向上を目指した新たな取り組みを展開しました。

今年度6回目を迎える「ESD北大プログラム」は、Hokkaidoサマー・インスティテュート (HSI) と同期間の、7月20日 (水) から29日 (金) までの10日間の日程で開催しました。初日の

歓迎レセプションによりプログラムの幕が開き、2日目の午前中は、本プログラムの特徴である、学生が互いの海外大学に留学する際に生活者の視点で当地を体験できる、いわゆる「Buddy Program」によるキャンパスツアーを実施しました。また、午後にはHSI参加大学院生と合流し、オープニング基調討論において、世界の課題解決に貢献できるグローバル人材の育成にとって不可欠である「異文化理解」と「多文化共生」をテーマに議論が交わされました。引き続き3日目以降においても、初参加のサハリン国立大学のInna Korneeva准教授による講義「サハリンにおける異文化理解の現状」と討論、また、グループワークとして課題解決型教授法 (PAL: Place-based Active Learning) を用いたグローバル的思考とローカル実践の演習など、活発な学習を実施することができました。

本プログラムのフィールドワークとして、5日目から1泊2日の日程で日高管内平取町を訪れました。この研修では、川上 満平取町長より「平取町における地域振興とアイヌ政策推進の取り組み」について講演をいただきました。さらに、アイヌ文化の狩猟体験や萱野茂二風谷アイヌ資料館を訪れるなど、事前学習で学んだ内容をもとにアイヌ民族文化に対する更なる理解が深まりました。

本プログラムの最終日には、北大プ

ログラムのまとめとして、5カ国6大学の学部生たちが5つのグループに分かれ、最終報告を行いました。報告では、テロ活動への勧誘、東アジアの戦争と対立、田舎と都市部の教育の不公平さなどを各国でも話題となる共通のテーマについて発表し、自国での現状と照らし合わせ、白熱した議論が行われました。最終グループ報告会終了後は、アジアの5大学の学生に対し、修了証書と記念品の授与が行われ、実りのある交流が達成できました。

本事業の特徴は双方向型短期留学であり、ESD北大プログラム終了後は、秋に北大生が2～6名の5グループに分かれて海外5大学への派遣が開始されます。訪れた現地で北大生が各大学の「Buddy」と再会し、10日間のプログラムに参加するものです。平成29年2月には市立札幌開成中等教育学校から教諭・生徒を招待しての最終報告会を行う予定です。

このように、本プログラムへの参加が契機となり、各大学のキャンパス、国籍、国家を超えて参加学生が仲間と教員をお互いに共有し合い、社会の持続可能な発展のために寄与できる「グローバル人材」の育成が期待されます。

(教育学院・教育学研究院・教育学部)



市立札幌開成中等教育学校におけるESD事前学習の様子



アイヌ民族の話を聞くESD参加者



ESDプログラムの創始者である河口明人本学名誉教授を囲んで

薬学研究院が「第8回薬学研究院研究発表会」を開催

8月5日（金）に、薬学研究院臨床薬学講義室において、「第8回薬学研究院研究発表会」を開催しました。本発表会は、教員のプレゼンテーション能力の向上及び他分野の研究に関する理解を深めることによる共同研究の活性化等を目的として、平成24年度に始まり、FD研修会を兼ねて年2回実施しているものです。

発表会は、南 雅文薬学研究院長による開会挨拶の後、神経科学研究所の

羽田沙緒里助教による「 γ セクレターゼ切断産物解析によるアルツハイマー病発症機構の解明」と題する発表及び、薬品製造化学研究室の穴田仁洋准教授による「有用生物活性物質の合成を指向した不斉触媒反応の開発」と題する2件の研究発表が行われました。

本発表会には教員56名が参加し、様々な分野の教員から発表者への質問があり、活発な討論が交わされました。また、参加者へのアンケートを实

施することにより、発表に関する感想や改善点等のアドバイスを発表者へフィードバックすることでプレゼンテーションの向上に役立てています。教員の異分野への知見の拡大やプレゼンテーションの参考に、また共同研究の活性化に繋がる非常に良い機会であり、大変有意義な会となりました。次回は平成29年3月に開催予定です。

（薬学研究院・薬学部）



発表する羽田助教



発表する穴田准教授

薬学研究院が「ハラスメントFD研修会」を開催

8月5日（金）に、薬学研究院臨床薬学講義室において、「ハラスメントFD研修会」を開催しました。今年度から本学においてハラスメント相談室が設置されたことに伴い、薬学研究院でもハラスメント問題への対応に一層の力を注ぐとともに、ハラスメント予防推進に努めるため、本研修会を企画しました。

当日は、本学ハラスメント相談室長・学生相談室長・就学支援室長であ

る文学研究科の櫻井義秀教授を講師に招き「北海道大学におけるハラスメント対応の現状と課題」と題する講演を行いました。講演内容は、本学におけるハラスメント相談のシステムと、本学における近年のハラスメントの傾向の分析が紹介されました。また、教育・業務の場で気を付けるべきこと、学生・教職員の多様性への配慮など、具体的な事例も紹介されました。

研修会には教員56名が参加し、質疑

応答の際には参加者から多くの質問がありました。研究・教育機関における人間関係や葛藤の問題を捉え直すことで、ハラスメントを未然に防ぐ方法について議論・意見交換をする良い機会となりました。本研修会は今後も継続していく予定です。

（薬学研究院・薬学部）



講演する櫻井先生



講師の話熱心に聞く参加者

薬学部で外国人留学生交流会を開催



集合写真

薬学部では8月18日（木）、薬学部バーベキュー・スペースにおいて、平成28年度外国人留学生交流会を開催しました。

本学部には、近年、外国人留学生は在籍していませんでしたが、今年度1年次に2名の外国人留学生が入学し、来年度本学部に進級する予定です。本

交流会は、外国人留学生が本学部の雰囲気を感じ、日本人学生及び教職員と相互に理解と親睦を深め、交流を通して生まれた絆が留学生の生活適応や日本人学生の国際経験に資することを目的として企画されたものです。

交流会には、学部外国人留学生のほか、生命科学学院生命医薬科学コースに

在籍する外国人留学生、国際交流に関心のある日本人学生と関係教職員22名が集い、バーベキューを楽しみながら歓談し、互いに親交を深め、盛況のうちに閉会しました。

（薬学研究院・薬学部）



親睦を深める外国人留学生と日本人学生

理学部で「ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～」を開催

理学部生物科学科（高分子機能学）では平成19年度から毎年、体験入学「ひらめき☆ときめきサイエンス」を実施しています。平成28年度は、7月30日（土）に次世代物質生命科学研究センターにおいて「調味料で光をねじる!!- 3Dメガネの原理? -」と題し、中学生、高校生を対象に実施しました。これは、キラル分子がもつ光学活性を利用し、タブレットパソコンから放たれる光のねじれ（回転させる）を体験すること、鏡像体リモネン（オレンジの香り、レモンの香り）やカルボン（ミントの香り、キャラウェイシードの香り）の香り体験を行うことで光やキラル分子の性質を学習し、これらが身近なデバイスや創薬などの研究に活用されていることを模擬体験するものです。

本プログラムは、科学研究費補助金「ポリエステル系ペプチドミミックを指向したVCDによるバイオポリマー立体構造解析法」（研究代表者：門出健次教授）の成果をもとに、中学生、高校生が大学の先端技術に触れることにより、科学のおもしろさを感じてもらおうことを目的としています。定員を上回る参加申し込みがあり、当日は中学生12名、高校生10名の合計22名が参

加しました。

開講式では、科学研究費について、日本の優れた研究や技術は科学研究費によって支えられていること、またそれは国民の負託によるものであることを説明しました。開講式のあと、受講者は化学生物学研究室（門出研究室）と先端生体制御科学研究室（西村紳一郎研究室）の2グループに分かれ、大学院生による実施研究の概要説明や科学実験には重要なノートの書き方の学習を行いました。

午前の部では、光のねじれ角度を測定する装置を簡単な材料を用いて、受講生自身に制作してもらいました。また光をねじる試料（光学活性物質）として、身近な調味料である食塩、砂糖（D-グルコース、D-フルクトース、スクロース）、味の素（L-グルタミン酸）を用いて指定された濃度に調製し調味料溶液を作成しました。

昼食はレストラン ポプラにて、全員でオードブルを食べながら、大学生活や体験実験などの話で盛り上がりました。昼食後は、研究施設見学ツアーを経て実験室に戻り、3Dテレビ、カナブンによる円偏光の体験、鏡像体リモネン、カルボンの香り体験も行いました。

午後の部では、光源としてタブレットパソコンを活用し、午前中に作成した各試料の光のねじれ角度を測定し、記録後、発表を行っていただきました。発表後は実験の解説を行うことで、光を利用した“生命の起源を探索する研究”や“創薬”など、様々な分野に技術応用されていることを紹介し、参加者に科学の面白さを伝達して、将来、日本を代表する研究者になってもらえるよう努めました。その後はクッキータイム（参加者との交流会）に入り、実験の感想や、来るべき大学生活についての抱負などを話し合いました。最後に、参加者に「未来博士号」の授与を行い、全員集合して記念撮影した後、解散となりました。

事前準備は大変でしたが、参加者が夢中になって実験している様子や、熱心に質問する姿を見て、少しでも科学に興味を持ってくれたのなら頑張った甲斐があったと感じています。実施にあたりご支援をいただいた実施分担者の先生、事務担当者の方々、また事前準備や当日の実験補助に協力してくれた大学院生、学部生に厚くお礼申し上げます。

（理学院・理学研究院・理学部）



どのくらい光がねじれましたか？



真剣に試料を秤量中



ちゃんと理解できたかな？

北大農場公開2016「搾乳からアイスクリームまで」

8月4日（木）に北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場（北大農場）において、農場公開を行いました。北大農場では毎年公開を行っており、テーマを決めて、施設や教育研究活動を紹介しています。今回は、搾乳やアイスクリーム作りを体験し、「どのようにして牛乳ができるのか」「牛乳がどうやってアイスクリームになるのか」を学んでもらう目的で開催し、主に札幌市内から小学生と保護者11組23名の参加がありました。

はじめに牛舎へ行き、防疫・衛生のためオーバーシューズを身につけ、技術職員が毎日行っている搾乳作業を見学した後、担当職員から手搾りの方法を教わって、搾乳体験を行いました。参加者は最初戸惑いながらも、だんだん慣れてきて上手に搾れたようです。「普段は牛に触れることはできないので良い経験になった」との感想をいただきました。

次に放牧地で、牛の餌である牧草やデントコーン、それらの加工品である乾草やサイレージ、その他、濃厚飼料について説明がありました。放牧地の牛糞が、虫によって細かく穴が空けられている様子を観察してもらい、微生物

物により分解され易くなって、牧草の肥料となることなどの解説もありました。現在の日本の酪農では、北大農場のような放牧が主流ではないという話には、参加者は意外という声をあげていました。

その後、アグリフードセンターに移動し、農学研究院の玖村朗人教授より、アイスクリーム製造の講義があり、身支度や手洗いなどを済ませてアイスクリーム作り体験に入りました。製造の手順はまず、牛乳・クリーム・脱脂粉乳・砂糖などの材料をよく混合してから、一定時間加熱殺菌してアイスクリームミックスが出来あがります。このミックスをフリーザーによって、マイナス10℃以下で15～20分間冷却攪拌させて完成です。今回は時間の関係で、前もって作っておいたミックスを用いて、フリージングの工程のみを行いました。この体験で製造したアイスクリームと、事前に成分の内容を変えて製造したものを食べ比べてもらいました。原料の違いで、大きく製品に影響が出ることをもってらえたようです。アイスクリームの冷却の待ち時間には、アグリフードセンター内の乳製品・肉製品の製造に使う色々

な機械の紹介がありました。

北方生物圏フィールド科学センターの三谷朋弘助教による乳牛の講義では、草食動物が胃の中で草を分解して栄養源とすることや、乳牛の体内で牛乳ができる仕組みなどの説明がありました。北大農場で搾った牛乳といくつかの市販牛乳との飲み比べも行いました。味の違いがはっきりとわかり、「北大農場の牛乳が一番おいしい」との感想をいただきました。講義の後は試食を兼ねた昼食時間とし、アグリフードセンターで製造したハム・ソーセージ・ベーコンなどの肉製品とアイスクリーム、バター、北大農場で生産された卵、牛乳が提供され、非常に好評でした。

半日という短い時間でしたが、「搾乳からアイスクリームまで」の一貫したシステム、普段何気なく口にしてる牛乳やアイスクリームについての理解がより一層深まったことと思います。今後も農場公開を通して、私たちの毎日に欠かせない「食」について考える機会を提供していきます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



搾乳体験



アイスクリーム作り

北方生物圏フィールド科学センターで「じゃがいも掘り」を開催

北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場では、9月3日(土)に学内教職員を対象とした「じゃがいも掘り」を開催しました。昨年は連日の雨により、残念ながら中止となりましたが、今年は時折晴れ間がのぞく、心地良い風が吹く中での開催となりました。例年申込者数が大変多いため、今回から抽選式とし、当選した119組の教職員が参加しました。

子供連れの参加者が多く、子供たちは畑の中をはしゃぎ回りながら会場までの道を楽しんでいました。開催場所である第一農場の西側では、受付後にスコップが渡され、指定された場

所でじゃがいも掘りがスタートしました。8月末に降った雨の影響で、じゃがいもの状況は良くありませんでしたが、参加者は形の良い大きなじゃがいもを探し出し、帰りはびっしり袋に詰まったじゃがいもを重たそうに持っていました。また、会場隅には普段農場で使用しているトラクターを展示し、運転席に乗車して記念撮影をする姿も多く見られました。

参加者からは「札幌の中心でじゃがいも掘りができ、改めて北大キャンパスのすばらしさを感じました」「家族みんなでとても良い経験をさせていただきありがとうございます。大切に

育ててくださったじゃがいもを大切にいただきます」など、生産者にとって嬉しい声が聞かれました。

生物生産研究農場では、体験的な農場実習のカリキュラムの中で、農産物の販売を視野に入れたじゃがいもの育成をプログラムに取り入れています。農場ではこうして育成したじゃがいもを実際に販売することによって、農場の教育・研究活動を知っていただき、学内の方々と交流を進めたいと考えています。

(北方生物圏フィールド科学センター)



じゃがいも掘り会場



収穫したじゃがいも



じゃがいもを手にする子供たち



トラクターに乗って記念撮影

北方生物圏フィールド科学センター植物園で 小学生向け公開講座「葉っぱで作る植物図鑑」を開催

北方生物圏フィールド科学センター植物園で7月28日（木）・29日（金）の2日間にわたり、小学生向け公開講座「葉っぱで作る植物図鑑」を開催しました。44名の小学生が参加し、植物園で採れた葉っぱを使ってオリジナル図鑑作りに取り組みました。

この公開講座は、実際の葉っぱを使った図鑑作り（押し葉標本）を通して、植物によって葉っぱの付き方、大きさ、かたち、色、肌触りなどが違う

ことを感じ、植物の多様性を理解することを目的としています。

作業はまず、参加者自ら気に入った植物の葉っぱを選び、採取しました。そして、特徴を丁寧に観察して記録し、テープで台紙に貼り付けました。その後、帰宅後に行う図鑑の仕上げ方法を学び、自分が作った世界でたった一つの図鑑を仕上げる約束をしました。

参加者からは、「植物のことや名前を少し覚えられた」「実際の葉っぱを

のせて図鑑を作ったので嬉しかった」「植物には色々な種類があって、葉の種類も色々あり楽しかった」など、たくさんの感想をいただきました。

今後も、少しでも多くの子供たちが植物の持つおもしろさや不思議さを発見できるようなプログラムを提供していく予定です。

（北方生物圏フィールド科学センター）



選んだ葉っぱの名前を確認し、葉っぱの特徴を記録



高山植物のチングルマを採取できるのも北大植物園ならではの



台紙に葉っぱの特徴が出るようにテープで貼り付け

北海道大学病院が院内レストランとコラボレーション企画 ～病院食メニューを一般向けに提供～

北海道大学病院では、栄養管理部と院内レストランROYALとのコラボレーション企画により、病院食を一般向けにメニュー化し、9月5日（月）から同レストランでの提供を始めました。

栄養管理部では、塩分量や栄養バランスに配慮した病院食の長所を維持しながら、食べやすさ、おいしさにこだわったレシピの開発を進めています。生活習慣病の栄養指導や、入院患者さんの栄養サポートから得られたノウハウを活かした健康レシピの集大成として、昨年8月にレシピ本「北海道大学病院のおいしい健康ごはん」を出版しました（同書は、一般の書店やインフォメーションセンター「エルムの森」等で発売中）。

同書の出版後、本院では、外来患者さんやそのご家族にも病院の食事を

知ってもらいたいと院内レストランにおけるメニュー提供を検討していたところ、同書の出版を知ったレストラン側も献立のメニュー化を考えていたことから、この度のコラボレーション企画に至りました。当面は「ザンギ定食」「鮭の南蛮漬け定食」「さっぱり牛しゃぶ定食」「切り干しdeナポリタン&鮭のマスタード焼き定食」の4メニューから1献立を週替わりで提供し

ていきます。

栄養管理部長の武田宏司教授は「すでに生活習慣病と診断された方はもちろん、予備群と診断されて不安に思っておられる方、あるいは病院食に関心を持っておられる方など多くの方に、ぜひ召し上がっていただきたい」と話しています。

（北海道大学病院）



レストラン前での記念撮影（右から2人目：武田教授）



企画メニュー「鮭の南蛮漬け定食」

レクリエーション

学内教職員ソフトボール大会の開催

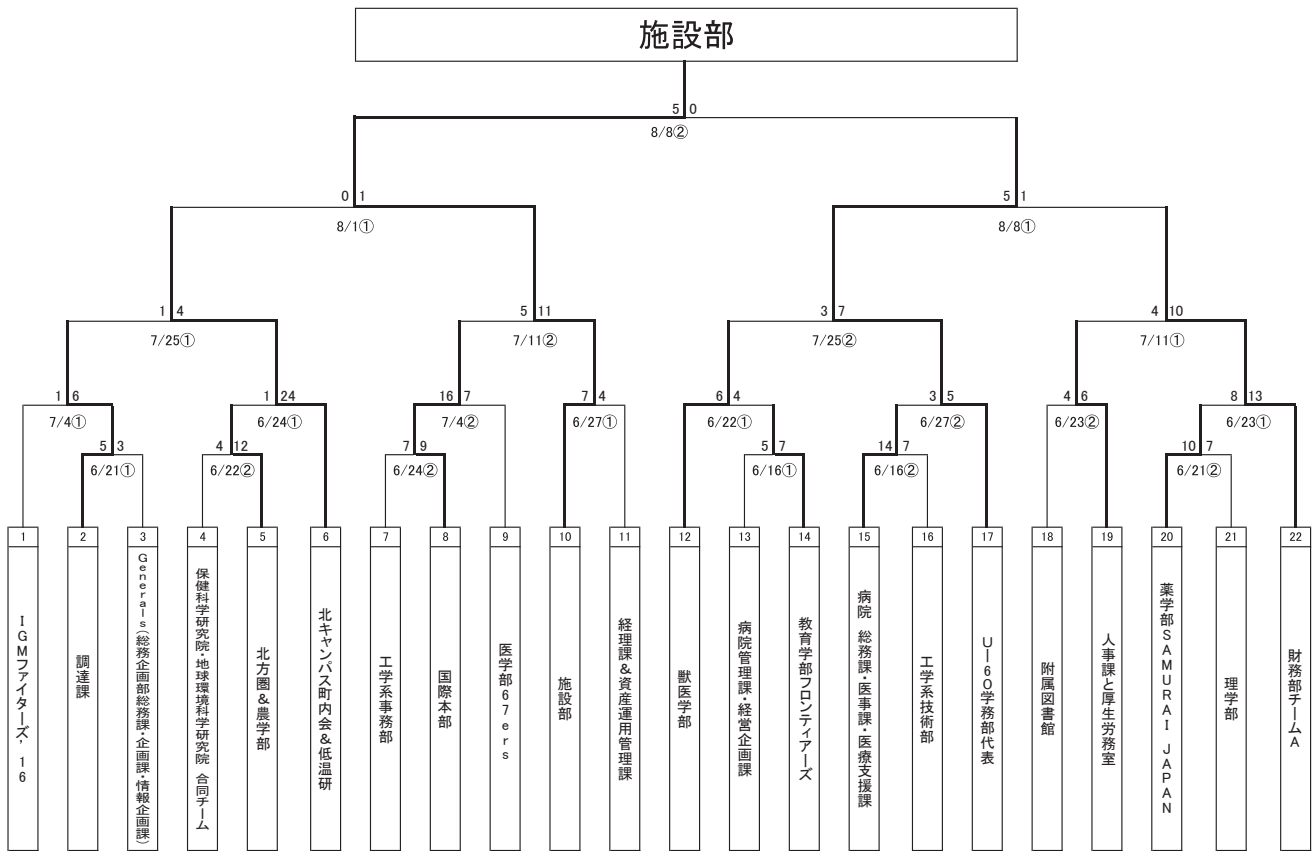
学内教職員ソフトボール大会を、6月16日（木）から8月8日（月）の約2ヶ月にわたり、北海道大学B球場で開催しました。

参加22チーム・約400名の選手により、連日熱戦が繰り広げられました。選手のみならず、応援の方々のたくさんの歓声があふれる中、「施設部」チームが見事に栄冠を勝ち取りました。

なお、対戦結果は以下のとおりです。

(全北大野球部, Re-birth)

平成28年度 教職員ソフトボール大会



優勝 「施設部」チーム



準優勝 「U-60学務部代表」チーム

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成28年8月4日）

協議事項・第3期中期目標期間における人件費抑制のための教員人件費ポイントの削減方策について

- ・国際連携機構の設置について
 - ・外国人留学生宿舎及び外国人研究者等宿舎の料金改正等について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

（平成28年9月1日海大達第119号）

本年9月1日付けで大学院保健科学研究院に寄附分野を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター分析・加工受託規程の一部を改正する規程

（平成28年9月1日海大達第120号）

創成研究機構グローバルファシリティセンターにおいて、材料加工に使用する設備の追加及び削除を行うこと並びに加工等料の変更を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

（平成28年9月1日海大達第121号）

本学のオープンファシリティについて、使用者の資格を改めること並びに設備の追加、削除及び使用料の変更を行うことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学低温科学研究所規程の一部を改正する規程

（平成28年9月1日海大達第122号）

本年9月1日付けで、低温科学研究所の水・物質循環部門に研究分野を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

平成28年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修

開催期間：平成28年 8月 3日～5日

開催場所：フロンティア応用科学研究棟

研修目的：北海道地区国立大学法人等の中堅技術職員としての立場と責務を自覚させるとともに、職務遂行に必要となる知識や社会的識見等を深め、国立大学法人等の技術系業務における中核となるべき職員として、その資質向上を図ることを目的とする。



開講式挨拶
(松藤敏彦技術支援本部副本部長 (工学研究院教授))



講義「ハラスメントの防止」
(高橋賢充, 築田美抄ハラスメント相談員)



講義「情報セキュリティ」
(南 弘征情報基盤センター教授)



講義・グループワーク等

(技術支援本部)

平成28年度国立大学法人北海道大学会計実務研修

開催期間：平成28年8月3日～5日

開催場所：北海道地区国立大学大滝セミナーハウス

研修目的：会計事務に従事する職員に、実務に必要な本学の会計制度及び国立大学法人北海道大学会計業務実施基準等に関する基本的知識を付与することを目的とする。



研修の様子（資産管理・資金管理）



班別討議



班別討議発表



修了証書授与

（財務部主計課）

表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
28.8.17	忠北大学校（韓国） Yun Yeo-pyo 総長	両大学の交流に関する懇談
28.8.26	フィリピン、インドネシア、モンゴル、マレーシア、ミャンマー、ベトナム、タイ訪問団（フィリピン大学、マレーシアサバ大学、モンゴル国立大学他）	Hokkaidoサマー・インスティテュート講師
28.8.26	北東連邦大学（ロシア） Vladlen Kugunurov 副学長	RJE3プログラム・サマースクール参加



忠北大学校（韓国） Yun Yeo-pyo 総長（前列中央右）



フィリピン、インドネシア、モンゴル、マレーシア、ミャンマー、ベトナム、タイ訪問団



北東連邦大学（ロシア） Vladlen Kugunurov 副学長（前列右）

（国際本部国際連携課）

■人事

平成28年8月5日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	寺 沢 重 法	大学院文学研究科助教

平成28年8月18日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 遺伝子病制御研究所准教授	三 浦 恭 子	遺伝子病制御研究所講師

平成28年8月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (任期満了) (辞職)	駒 込 香 織 石 田 麻 耶 岩 城 麻 実 神 田 純 佳 小 山 純 子 山 田 怜 奈 山 本 雄 哉	北海道大学病院医療技術部臨床検査技師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師
【嘱託職員】 (辞職)	不 動 康 則	監査室

平成28年9月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院経済学研究科教授 大学院工学研究院教授 低温科学研究所教授	石 井 利 昌 小 澤 丈 夫 力 石 嘉 人	大学院経済学研究科准教授 大学院工学研究院准教授 採用
【准教授】 大学院医学研究科准教授 北海道大学病院准教授 遺伝子病制御研究所准教授 情報基盤センター准教授	森 川 守 七 戸 秀 夫 水 津 太 飯 田 勝 吉	大学院医学研究科講師 採用 遺伝子病制御研究所講師 東京工業大学理学院准教授
【講師】 北海道大学病院講師 北海道大学病院講師 人獣共通感染症リサーチセンター講師	氏 家 英 之 乃 村 俊 史 古 田 芳 一	北海道大学病院助教 北海道大学病院助教 採用
【助教】 大学院工学研究院助教 スラブ・ユーラシア研究センター助教	田 鎖 順 太 高 橋 美野梨	採用 採用
【係員】 学務部学生支援課 理学・生命科学事務部事務課 工学系事務部教務課	横 山 沙 織 小 田 歩 実 渡 士 和歌奈	理学・生命科学事務部事務課 学務部学務企画課 工学系事務部総務課

新任教授紹介

平成28年9月1日付



経済学研究科教授に

いしい としまさ
石井 利昌 氏

現代経済経営専攻経営分析講座

生年月日

昭和47年11月14日

最終学歴

京都大学大学院情報学研究科博士後期課程修了（平成12年3月）
博士（情報学）（京都大学）

専門分野

オペレーションズ・リサーチ



工学研究院教授に

おざわ たけお
小澤 丈夫 氏建築都市空間デザイン部門
空間計画分野

生年月日

昭和36年6月18日

最終学歴

東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了（昭和62年3月）
博士（工学）（北海道大学）

専門分野

建築意匠，建築設計，建築史，地域デザイン



低温科学研究所教授に

ちからいし よしと
力石 嘉人 氏水・物質循環部門
同位体物質循環分野

生年月日

昭和51年9月29日

最終学歴

東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了（平成16年3月）
博士（理学）（東京都立大学）

専門分野

有機地球化学，同位体生態学

訃報

名誉教授 いながき ふゆひこ 稲垣 冬彦 氏
(享年69歳)



名誉教授 稲垣冬彦氏は、平成28年6月15日、享年69歳でご逝去されました。ここに生前のご交誼、ご業績を偲び、慎んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和45年3月東京大学理学部化学科を卒業し、修士課程では島内武彦教授の指導のもとに振動分光学的研究に従事されました。その後、東京大学理学部生物化学教室に博士課程学生として進学し、宮澤辰雄教授のもとでNMR法を用いた生体分子の構造研究を始められ、その後一貫してNMR

法による生体分子の構造研究を進めてこられました。

この間東京大学理学部助手、東レ株式会社主任研究員、財団法人東京都臨床医学総合研究所部長の要職を歴任後、平成11年4月に本学薬学研究科教授として就任し同22年3月に退職、同年名誉教授及び先端生命科学研究院特任教授として、この春まで本学の研究、教育に力を注いでこられました。

先生は、本学はもとより、我が国のNMR、構造生物学のリーダーとして、二次元NMR法等NMR技術の開発に尽力され、天然物、糖脂質糖鎖、EGF等生物学的に重要な蛋白質の構造を決定してきました。この中には、ニューヨーク大学Joseph Schlessinger教授、マックス・プランク研究所Axel Ullrich博士との共同研究も含まれています。その後、システムとしての構造生物学を目指し、大阪大学審良静男教授との共同研究で自然免疫、東京工業大学大

隅良典教授との共同研究でオートファジーの構造生物学的研究に取り組み、国際的にも高い評価を受けています。

また、文部科学省の「タンパク3000プロジェクト」の拠点リーダー及び「ターゲットタンパク研究プログラム」の主任研究者、更には特任教授就任を前後して、文部科学省「未来創薬・医療イノベーション拠点形成事業」の代表研究者として構造生物学を先導すると共に、本学北キャンパスに我が国有数のNMR施設を創設し、運営にあたりと同時に若手研究者の指導育成にも尽力されました。

以上のように、先生の教育・研究者としての業績は計り知れないほど大きなものであります。これまでの偉業の達成を称えるとともに、ここに謹んで稲垣先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(薬学研究院・薬学部)

名誉教授 わたなべ ひろと 渡辺 寛人 氏
(享年81歳)



名誉教授 渡辺寛人氏が平成28年6月20日に逝去されました。先生は、昭和33年3月北海道大学工学部応用化学科をご卒業され、同大学院修士課程を経て、同35年4月より神鋼ファウダー株式会社に勤務されました。その後、昭和38年7月に室蘭工業大学に採用され、同60年2月に北海道大学工学部に教授として着任、工業分析化学第二講座をご担当後、工学部機構改革により平成6年から分子化学専攻生物計

測化学分野を担当されました。学部生、大学院生の熱心な教育・研究指導にあたり、多くの技術者・研究者・教育者を育成され、学生からも大変慕われていました。

先生は、溶質の二相間分配に関する分離化学的研究に携わり、希土類金属の工業分離に有効な新規溶媒抽出剤の開発、界面活性ミセルによる可溶化現象の分配理論による解明、ミセル水溶液の二相分離現象を利用した新規抽出法の開発などを通じ、金属錯体などの低分子化合物からタンパク質などの生体高分子に至るまで様々な物質の分離法へと展開されました。その独創的かつ先進的な分離技術は、分析化学のみならずバイオテクノロジーなど様々な分野へと波及し、国内外で高い評価を得ています。これらの研究業績により、平成9年には「ミセルを場とする分離法の研究」に対し日本分析化学会

賞を受賞されています。

学内では、北海道大学廃液処理施設将来構想検討委員会委員長、北海道大学環境保全センター運営委員会委員長などを務められ、本学の環境保全に尽くされました。学外においては、日本分析化学会副会長、日本分析化学会北海道支部長並びに文部省学術審議会専門委員会、同省大学入試センター教科専門委員会、同試験問題特別専門委員会、北海道教育委員会等の各種委員を歴任され、学術の振興並びに我が国と北海道の理科教育・職業教育の発展に貢献されました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 東 克彦 氏
(享年96歳)



名誉教授 東 克彦氏は、平成28年8月16日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和18年9月に北海道帝国大学理学部化学科をご卒業され、同月北海道帝国大学触媒研究所助手に採用されました。その後、同研究所において昭和36年4月に助教授、同47年8月に教授に昇任されました。その間37年

の長きにわたり教育・研究に心血を注がれ、昭和58年4月停年により退職、同月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

研究者としては物理化学、特に金属触媒の表面物性に関する研究に勤しまれ、固体表面の吸着現象及び触媒作用の実験的研究に功績を残すとともに、「電界放射顕微鏡」の開発と応用に大きく貢献されました。昭和36年5月より理学研究科を担当し、物理化学の研究者、技術者の育成に努められました。また、昭和55年4月から同58年4月までは触媒研究所長を務め、評議員として大学運営に参画されました。

先生は、スポーツを通しての学生の教育指導にも力を注がれ、昭和53年10月から同55年4月まで北海道大学体育指導センター長を務められた他、サッカー部及び漕艇部（現ボート部）の学

生指導に尽力され、同57年には日本サッカー協会功労賞を受賞。漕艇部では永年にわたり副部長、部長、相談役として指導に当たられ、北海道ボート協会会長も務められました。

学外においては、日本表面科学会の設立に尽力し、評議委員を努められました。また、多くの国際会議、国際シンポジウムでは組織委員及び座長として活躍し、斯界の発展にも寄与され、平成11年4月には勲三等旭日中綬章を受章されました。

これら教育活動、研究活動に尽力されるとともに、学術振興、人材育成に多大な貢献をされました先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(触媒科学研究所)

准教授 長谷川 拓哉 氏
(享年48歳)



准教授 長谷川拓哉氏が、平成28年8月20日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和44年10月24日に北海道に生まれ、平成5年3月に北海道大学工学部建築工学科を卒業し、同7年3月に北海道大学大学院工学研究科建築工学専攻を修了されました。その後、建設省建築研究所、建設省住宅局建築指導課を経て、平成16年8月から北海

道大学大学院工学研究科助教授（その後、改組により准教授）として活躍されてきました。なお、平成15年12月に北海道大学大学院工学研究科より博士（工学）の学位を授与されています。

先生のご専門は建築材料学であり、コンクリートを主とする構造材料、内外装材料、各種機能材料などの建築物のライフサイクルを通じた性能評価及びその生産・維持管理に関する研究を積極的に進められました。特に、仕上材料の躯体保護効果などのように、材料単体だけでなく実際の建築部材を想定した性能評価に関する研究が特徴的なものです。その他、各種材料だけでなく、補修・改修工法、鉄筋コンクリート組積造などの各種構工法、非・微破壊検査方法、美観、エイジングなど幅広く研究されてきました。また、各種学協会活動などにも積極的に関わり、委員会の委員長なども数多く経験

されました。

教育面では、工学部、大学院工学院において英語コース科目を含む専門科目を担当し、学部生のアンケート調査によるエクセレント・ティーチャーズを数回受賞されました。また、研究室の学部生、大学院生には、実験や調査、論文作成など通して直接的な指導を行い、多くの優れた人材を輩出されてきました。

以上のように、先生は、建築関連分野の研究活動、学協会活動及び教育活動に尽力され、人材育成にも多大な貢献をされました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 田中 明 氏
(享年91歳)



名誉教授 田中 明先生が、平成28年8月22日に逝去されました。ここに先生の生前のご功績とご薫陶を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は昭和22年に北海道帝国大学農学部農芸化学科を卒業後、同28年北海道大学助手、同42年同大学教授に昇任し、農学部農芸化学科作物栄養学講座担当となり、同63年3月停年により退

官、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。昭和37～41年は、フィリピンに設立された国際稲研究所（IRRI）の初代植物生理部長として着任され、熱帯イネの超多収品種IR8の創出を主導し、「緑の革命」として国際的にも高く評価された著名な功績をあげられました。

先生は水稻の栄養生理研究を基盤として、当時の「肥料学」から「作物栄養学」という新しい学問分野を確立し、一貫して作物の生産性（収量）について独創的な研究を展開され、「緑の革命」のモデル実証へと繋がりました。これらの業績は、196報の学術論文や著書『水稻の栄養生理』『熱帯稲作生態論』『作物比較栄養生理』『熱帯農業概論』などに纏められています。

これらの功績により、日本土壤肥料学会賞、日本農学賞、日本学士院賞、勲二等瑞宝章、国際コメ年記念研究功績賞等を受賞されています。また、日本土壤肥料学会会長、国際的にはSoil Science編集顧問、国際農業研究協議グループ（CGIAR）技術諮問委員、国際土壤学会会長などの要職を歴任されました。

以上のように、先生は、長年にわたって学術の振興、教育、人材の養成、発展途上国における食糧問題の解決に対して多大な貢献をされ、その功績は国際的にも極めて顕著なものであります。先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(農学院・農学研究院・農学部)

編集メモ

●キャンパス内のナナカマドも色づき始め、少しずつ秋の気配が感じられるようになりました。

●第5回目となる「ホームカミングデー2016」が無事終了しました。当日は天候にも恵まれ、多くの皆様にお越しいただきました。感謝申し上げます。来年度のホームカミングデーは、9月30日（土）に開催予定です。皆様のご来学を心よりお待ちしております。





2012.9.2 日高本線 厚賀～大狩部（日高町・新冠町）

北の鉄道風景 42 残照の中を

走行中の鉄道車両が静止しているように見える写真を撮るためには、カメラのシャッターを開ける時間を非常に短くしなければならない。このとき、カメラの感光面に取り込まれる光量は少なくなるから、フィルムカメラを利用していた頃は、夕暮れや夜間などの暗い時間帯に鉄道車両の走行シーンを撮影することは困難であった。しかし、デジタルカメラの高感度性能の向上は著しく、それによって夕景

や夜景の中を往く鉄道車両を高画質で撮影することが可能になった。写真は残照の中を駆ける日高本線の普通列車である。高波による線路被害で運休が続き、廃線の可能性も浮上している同線区に、再び列車が走る日はやってくるのだろうか。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ⑨ No.750 平成28年9月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html